



## バー・アンバー(11)



## アダルト小説

### 多谷 昇太

しかしそれにしても俺はなぜこゝも狭量なのか、すでに後の祭りではあるが心中で舌打ちしてしまう。相手はぞんざいな態度を取られると我慢ならないのだ。もはやこれまで！とパツと相手を遮ってしまう。介護ジャーナリストとしてインタビューを熟すうちにその悪癖もかなり薄らいではいるのだけれど、反面でその憂さ晴らしのように私生活においてはその性癖が強まっているのかも知れない。全体でAD博士がいま聞いたそのXX大学で心理学教授をしているとは限らないではないか。女医が何かの伝手で他の大学やら病院から非常勤医師を招いている可能性だってあるのだ。ちえつ、しかし今となってはもう仕方がない。車のナンバ―から身元を探るという手もまだあるし、もうここはこれまでだ…などと踏ん切りをつける。むしゃくしゃした呈で会計を待ち続ける。10分、15分と待つがなかなか名を呼ばれない。その間に別の患者が診察室に入って行ったし薬も何も要らないと云ったのだからさっさと会計を済ませればいいではないか、などと思

う。貧乏ゆすりをするうちに携帯にメッセージが入った。見れば山口からだ。「海鮮風炉で一杯やろう。OK?」とある。「OK。その前に(午後)3時半頃にそっち(会社)に行くよ」と返す。「おう、わかった」と受けたところでちようど「田村さん」と名前を呼ばれる。やれやれだ。「はい」と返事してカウンターに行くくと「田村さん、お薬が出ています」という意外な言葉。へっ?とばかり処方箋に目を通すとデエビゴとグランダキシンという2種類の薬が処方されていた。これを持って薬局に行くのだと思いきやいまここでくれるのだと云う。それぞれの薬の種類と服用方法を聞く。「こちら(デエビゴ)は睡眠薬で就寝前にお飲みください。こちら(グランダキシン)は精神安定剤です。1日3回、1錠づつを…あれ?ちよ、ちよっとお待ちください」と俺に断つてから快活で感じのいい女性事務員が診察室に通じるドアをノックして中へと入って行った。何だかわからないがとにかく俺は『へー、こいつは意外だ。薬が出るとはな。なぜかな?…ふん、単に薬を出せば診療報酬が増すっていうことだろうさ』などと安易に思うしかない。しかしいくばくもなく窓口事務員が顔を赤らめて戻って来「失礼しました。あ、あのですね。こちらのお薬(グランダキシン)も

…あ、あの、やはり就寝前に1錠だけお飲みください」と狼狽気味に告げる。何やら診察室の中で叱責でも受けた感じである。しかしこちらもなぜそうなったのかわからず別に気にもしないで薬をいただき会計を済ませた。解放されたようにクリニックを出、内堀通りを渡って新橋駅へと向かう。時刻は3時ちよつと前、秋葉原駅から200メートルほどのところにある会社までは山口に告げた3時半頃には着くだろう。路上禁煙禁止という禁忌にも似た都の条例をも顧みず俺はポケットからわかばを1本取り出すと旨そうに火を点けた…。

テナントビル3Fにある会社に着くとデスクの山口と挨拶を交わし、彼が指示するままに当たり前のように整理部や校正部の助けをし、新入記者にインタビュ어의仕方を教えたりする。これは当たり前のことで山口からは何もありがたがられない。「本来ならお前がこの仕事（デスク）に就く筈なのに抜けやがって、フリーなんぞになりやがって…」という調子で山口は一切遠慮などしないのだ。それはこちらも心得たものでただ肅肅と無給奉仕をする。5時を回って社員たちが帰り支度を始めたところで「おう、もういいよ。海鮮（風炉）行こうや」と解放される。「ちえっ、相変らず人使

い荒いな」「うるせえ、うるせえ。それより例の女のこと、根掘り葉掘り聞く…あ、ご苦労さん」最後の言葉は「例の女」を聞き咎めたような目つきで脇を抜けて行った校正係の女性社員に云ったのだ。ウイークエンドの花金でもあり早々と帰って行く社員たちを皆見送ってから我々も施錠をして会社を後にした。

会社から秋葉原駅に向かって100メートルほど行つたところに海鮮料理や地酒で有名な広い居酒屋がある。宴会席が幾間もある結構なお店だがその一角、仕切り版で仕切られた4人掛けの席に俺たちは陣取つた。純米吟醸の熱燗を、牡蠣酢や刺身、帆立のバター焼きなどを注文し、差しつ差されつ気の置けない一杯をやり始める。「くーっ、この一杯のために生きてるな」山口が嘆声をもらす。それに微笑みながら「んだな。もつとも俺はバーでウイスキーのオンザロック…ってやつだけだな」と答えたがそれを聞き咎めたように「だからそれよ、それ。そのバー…何と云ったっけ?」「アンバー。バー・アンバー」「そうそう、そのバー・アンバー。このあとそこに行こうと云っているのになぜ行かせないのよ?」

【居酒屋、海鮮風炉で差しつ差されつ… from pinterest】



「無茶云うなよ、山ちゃん。それこそ昨日の電話でのお前のセリフじゃないけど、その年で女？…ってやっただぜ。上（かみ）さんと子供はどうした？これから行ったら帰りは夜中だ」半ば冗談で半ばマジで云ったのだがもちろん山口はそんな男ではない。彼の意が別にあることは分かっている。ここに来る途中で、電話で彼に告げた「珍しい女」と云ったその分けを、掻い摘んで話していたのだ。「分かっているって、そんなことは俺が入れ込む分けないっしょ？俺が行きたいのはお前が」「この世の女じゃない」なんて云うからだよ。ってことはその女コレなの？（両手を前に垂らして見せる）その女、足あった？」「ガハハハ。馬鹿云うなよ。あった、あった。足も、それに…（声を潜めて）オッパイ

もな」「なにいろ？オッパイ？！」偶然通りかかった女給が口を押さえて吹き出す。それへ山口が「いやいや。ごめん、ごめん、菊さん（この女給は既に俺たちの馴染みだった）。（俺を指差して）こいつが卑猥なことを云うからさ。あ、あの、お詫びにお銚子もう一本ね。

今度は本醸造でお願いします」「はい」と承ったあと「いいんですか？支店長さん、オッパイなんて云って。会社の人たちに告げ口しちやいますよ」と云うのに「ダメダメダメメ…」と大仰に手を振る山口。デスクの威厳が落ちると云うものだ。女給が去ったあとで俺は「実はな…」と事の顛末を語って聞かせる。アダルトティックなところは極力省いて、またバーを後にして以後の霊との遭遇体験をも省いてだが、しかし肝心要の、彼女ミキが××××××××××の霊であることを確信している、そう告げてみせたのだった。

「××××××××××？あの××××××××××殺人事件の？それが何よ、えーと、何て云ったっけ？シヨ、シヨーダイエイ？」

「そう、邵廻瑩（シヨウダイエイ）。いま云った××××××××××さんへの身体の提供者だよ。××新聞の新聞記者だ」

「へー、邵廻瑩ね。霊媒みたいなものかね。しかし：

(失笑してから)「おいおい田さん、お前さんがその手の類のことをユーチューブで配信しているのは見て知っているけどさ、それにしてもなあ：ちよつと大丈夫かや？頭(おつむ)の方は。あんまり入れ込み過ぎてちよつとおかしくなってるんじゃないの？一度精神科に見てもらった方がよくないか？」話題が話題だけに立て込んで来た廻りの客の耳を気にしながら山口が小声で宣つてくれる。「もう行つて来たよ、会社に来るまえにな。精神科へ」「ほんとかよ。で、どうだったのよ？その、医者 of 診察結果は」「ああ、それが気に喰わなかったんでな、逆に俺の方で医者 to 病名を告げて出て来てやった」などとアンバー以後の顛末を、なぜ精神科に行ったのかまでを聞かせてやる。いよいよ目を怪しくさせる山口に「嘘じゃないぜ。ほら、これが薬と処方箋だ」と云つてリュックから出して見せ、ついでにジャンパーの内ポケットからアンバーの領収証の表と裏を見せてやった(ついミキが愛しくつてこれを持ち歩いていたのだ)。「その領収証の裏に走り書きしてある字がミキの、つまりXXXXXXXXXXXXXXXXXさん本人の字だよ。もしどこかでXXXXXXXXXXXXXXXXXさん手書きの文でも見れるんだったら筆跡鑑定をしてみればいい。昨日の領収証の日付と云い、これが何よりの証拠となるだろ

う？」今度は山口が目を白黒させて「へーっ。サマンサクリニツク、巢鴨のヤクザXX組ねえ」と絶句し暫し領収証に見入る。

「どうだい？」「うーむ、一応：魂消たな。しかし仮にだよ、もしこれが本物で：つまりお前の云つてることが本当だったとして：その場合なぜ：な、なんでXXXXXXXXXXさんの霊がお前の前に出てくるのよ。面識なんかなかったんでしょ？彼女と」と痛いことを聞いてくる。それこそが俺が自問中のことだ。山口がお替りした本醸造の徳利から勝手に酒を注いでそれを飲みながら「お前じゃないが、うーむだな：まさか俺が彼女に入れ込んだから出て来た分けじゃあるまいし：うーむ、ま、心当たりがないこともないんだ。そのうち分かったらまた云うよ」とだけ答えておく。さてもこれ以上山口をこの話に引き込むことは憚られた。彼は仕事上でも家庭持ちという意味でも責任のある身だ。ポン友の間柄で、ぜひ話を聞かせると云うから話して聞かせてやったまでのこと、件の巢鴨のヤクザでも絡んで来たたら大変だ。俺は「ま、この話はこれまでににして、ところで、どうだい？次の(会社の、介護記事の)企画は。次は福祉器具メーカーへのインタビューとか云つていたな…」などと聞きながら本醸造の徳利を彼

の盃に傾けようとする。しかしそれへ「そっち。純米吟醸」と俺の徳利を要求してから「ああ、それはまた電話なりで云うよ。しかしだな、田さん。ユーチューバーとしてのお前さんの熱意はよく分かるけど、しかしそのう…そんな××組なんて云う実際のヤクザまで【映画・異人たちの夏…ネット上より拝借】



出て来たんじや、ちよつとヤバくないか？それにその、もし××××××××××さんの霊が本当だったとしてだよ、それだつたらお前、こりや牡丹灯籠だよ。例の…あれ？何て云つたけかな…あ、そうそう、大林宣彦の異人たちの夏っていう映画があつたけど、そのバージョンとなりやしないかい？」などと山口は逆に俺の身を案じてくれた。俺はわずかに沈黙したあとでやおらこう返事をしてみせる。

「そうだな、山ちゃん、もしそうだとしてもさ、俺だつていつかは死ぬんだ。その映画の、その…異人側になる分けだよ。そのことに何も拘泥はしないさ。ただ

…」「ただ…何だよ」「ただな、俺はミキの、あ、いや、だからその××××××××××さんの無念を、彼女が今いる闇を晴らしたいんだ。彼女に入れ込んでそう云う分けじゃなくて（でもないか？）、そうすることが彼女ばかりか俺自身の、もつと云えば我々万人の闇を晴らすことにつながると思うんだよ」

いつの間にか入れ替わってしまった本醸造の徳利を盃に注ぎ旨そうに飲み干してから、俺は思い切つてミキの言葉を山口の前で暗誦してみせる。

「あのバーで××××××××××さんは俺にこう云つてたんだぜ。『そう！そう！そうなの！田村さん…わたしは本当に寂しいのよ！そして怖いのよ！廻りは真つ暗っ…！何もありません、何も見えない。怖くって、寂しくって、悲しくって…それで堪えられなくなった時に、アイツからお誘いが来るのよ』つてな」

「（呆れ顔で）よー覚えやがったな。ところでそのアイツって誰よ？」

「（失笑して）その言葉が強烈に心に残つたんでな。それで、そのアイツつてえのは≧AD博士、さつき云つたバーの会計係、渋谷の道玄坂で、遠ざかる車の中に見たやつだよ。しこうして実際はどこかの大学の医学博士…じゃないかと思つているんだ。≧AD博士って

のは俺が命名したんだよ」

そこまで聞いて山口はもうそろそろ上がりとはかり一献飲み干しては大きく溜息をひとつ吐いた。

「ふーっ。≧AD博士ねえ。しこうしてそういった連中が許せねえと、ヤクザやら、そいつらを使って我意と我欲を押し通す、権力や金の亡者どもが許せない：って分けだな。ホントに田さん、あんたらしいな。しかしそう目くじらばかり立てていたら疲れるだろうよ。そんなバカどもは放って置いてさ、上（かみ）さんでももらったらどうよ」

「なに？上さん？もう、もらってるよ。こいつだ（と云ってポケットからタバコを出して見せる）。こいつと一発やりたくなつた。そろそろ上がるか？」

「ああ、そうしようや。その上さんが俺はおつかなくなつて来たからな。（ちようど通りかかった女給に）あ、菊さん、上がり湯ちようだい」

「はい。（山口の言葉を聞き齧って）支店長さん、このあとハシゴなんかしちゃ駄目ですよ。山の神、山の神。うふふ」

「俺はしねーよ。だけどこいつ（俺）は危ないな。何せ花の独身貴族だからさ」

「馬鹿野郎！」こうして山口への『介護新聞記者なら

ぬ“ユーチューバーとしての現況報告は終わった（こ

までで優に1時間以上過ぎていたのだ、俺のレクチャーやらで）。海鮮風炉を出て秋葉原駅までは山口といっしょに行く。山口は吉祥寺に住んでいた。総武線改札口に向かう山口が「おい、田さん、まっすぐ帰るんだろ？」と聞いて来た。俺は「ああ、山手線だな」と答える。「なに？山手線？なんで：ああ、わかった。神泉、とかだな。カーツ、しょうがねえなあ、まったくもう。

気をつけるよ」で手を振って別れる。ふっ、しかし感のいいやつだ。俺の性癖と意気込みからしてさもやありなん、と見抜いてやがる。確かに、俺も自分が頑固で不器用だと思う。思い込みも激しからう。しかし「助けてよ、田村さん：」とすがったミキを放って置けようか？本来ならあり得ぬ、イブから示された『真の人生』への指針を放棄できようか？俺はミキの闇への感触を得べく神泉駅へと向かうのだった…。

(七) 天国と地獄のサスペンス (2)

(※「天国と地獄のサスペンス」の章が余りに長くなつてしまったので(1)と(2)に分けました。章の趣旨は前章と同じです)

渋谷までは30分ほどで着き、渋谷スクランブル交差

点から道玄坂上交番前の交差点に向かって歩いて行く。京王線を使って神泉駅まで行けばいいのだが事前に調べて置いた目当てのスポットがあつて、敢てこうしたのだ。道玄坂上交番前の交差点を右に曲がり一つ目の道を左折、50メートルほど行くとまた交差点があつて、そこを渡った左角に竹の柵で覆われた料亭三長がある。その竹の柵を窪むようにしてお地蔵様が一体安置されているのだ。道玄坂地蔵尊と云いこの前で××××××さんが夜な夜な客引きをしていたと云う。センター109の地下トイレで着替えをしてから恐らくここまで歩いて来たのだろう。前の道は幅2、3メートルほどの一通であり、午後8時の今の時間でさえ余り人通りはない。神泉駅前の例のアパートや此処をなぜ客引き場所や売春場所として選んだのか定かではないが、事件以来ヤスラーと呼ばれる女性たちがよく此処に押みに来るのだそう。それほどに女性たちにとってはインパクトの強い事件だった分けだ（俺もそうだが）。ところでインパクトが強いと云えばこの事件以来、売春街として名の知れていたここ円山町界限でつとに売春婦の姿が消えたそうである。警察・町内会の意向やヤクザの慮り等のゆえだろうが、しかし反面トーヨー広場始め都内各地での少女売春は後を絶たな

いのだとか。しかしこれはもう、まったく！…でしかない。この闇を、人間界の闇を、俺はこれから××××××さんとともに真摯に見つめねばならないのだ。さてその地蔵尊の前に立って暫し往時の××さんに思いを馳せる。彼女はいつたいどんな思いで此処に一人で立っていたのだろうか？感無量である。美貌でグラマラスな邵廼瑩と違って往時の××さんは殆ど骨と皮の姿だったと云う。

(…続く)

【渋谷道玄坂地蔵尊、××××××××××さんがこの前に立って客引きをしていた…ネット上から拝借】

